

氏名	Chong Huey Ching
ヨミガナ	チョン フィチン
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博第3号
学位授与年月日	平成29年10月23日
学位論文題目	The Discovery of Body — A New Concept of Musical Notation in the Works of Kurtág, Ferneyhough, and Harada— （日本語訳） 身体の発見 ——クルターグ、ファーニホウ、原田の作品における 新たな記譜概念——
博士論文審査委員会	（主査） 教授 西村 朗 （作曲） （副査） 教授 フェイギン ドミトリー（チェロ） （副査） 教授 加藤 富美子（音楽教育学） （副査） 准教授 原田 敬子 （作曲） （副査） 准教授 藤田 茂 （音楽学） （副査） 柴山 拓郎 （作曲） （東京電機大学理工学部准教授）
博士演奏等審査委員会	（主査） 教授 西村 朗 （作曲） （副査） 教授 糀場 富美子（作曲、ソルフェージュ） （副査） 教授 岡田 敦子 （ピアノ） （副査） 教授 菅原 淳 （打楽器） （副査） 教授 加藤 富美子（音楽教育学） （副査） 准教授 伊達 英二 （声楽） （副査） 准教授 原田 敬子 （作曲） （副査） 准教授 藤田 茂 （音楽学） （副査） 伊藤 弘之 （作曲） （日本大学芸術学部教授）

審査結果の要旨

1. 博士論文審査委員会

日 時	平成 29 年 2 月 22 日 (水) 10 時 00 分～12 時 30 分
場 所	東京音楽大学 J208
判 定	六名の審査委員全員一致で、合格と判定した。
審査結果の要旨	<p>チョン・フィチンの学位申請論文「身体の見聞—クルターグ、ファーニホウ、原田の作品における新たな記譜概念—」は、現在の new music の作曲家の記譜にみられる、奏者の内的状態をふまえた記譜概念に注目し、その内容と意義を検討して、「生理的身体性」と「抽象的身体性」という理論導出を試みている。その過程で、演奏行為のプロセスに鋭く注目し、作曲家の多様な記譜とそれが喚起する演奏家の可視的・不可視的身体状況、そして聴き手という関係性、コミュニケーションのありようにおける新たな視座、および創作や聴取の新たな可能性を提起している。</p> <p>本論文のテーマ設定は意欲的であり、独創性も高いと認められる。論述に関して、理論展開にやや未完成な部分もあるがその方向性は的確で、今後のさらなる充実が期待出来る。それが審査員全員の共通評価であった。</p> <p>また、本論文執筆とともに執筆者自らが創作発表した作品群は、論文の内容を生き生きと反映しており、結果として音楽の持つ最も固有の性格＝見えない力、に迫る創作を展開しているという姿勢や成果も評価できる。論文と作品、その結びつきの達成度においても本論文は DMA (作曲) の学位に値するものであると認められる。合格認定は審査員全員一致の合意による。</p>

2. 博士演奏等審査委員会

日 時	平成 29 年 4 月 24 日 (月) 18 時 30 分～19 時 30 分
場 所	東京音楽大学 J スタジオ
判 定	このたびの作品演奏審査会では、自らの研究課題を生かした個性的かつ実験的な魅力を持つ新鮮な作品の演奏発表があり、演奏も良く準備されて質が高く、プログラム冊子での自作解説も充実していた。結果、審査員全員一致での合格となった。
審査結果の要旨	<p>審査結果は、審査員全員一致での「合」であった。 審査員の意見は以下のようなものであった。</p> <p>“本人が深めようと努力をしてきた音楽創造のアイデアが、未完成ではあるものの一定のレベルに達しつつある。記譜は一步間違えると、トータル・コントロールismになってしまう恐れがあり、それを本人は奏者との密なやりとりを実現させる過程での反省材料とし、本人なりに次作にどのように生かすべきかを幾度となく考え工夫した。そのことは評価に価する。”</p> <p>“自作の作曲の理念に基づいた作品群で、説得力があり、又、各作品における解説も自身の考えが端的に述べられていた。演奏も素晴らしいものであった。”</p> <p>“作品解説文と音になった作品の姿に少なからぬ齟齬も感じられた。コンセプトと音楽の間に一定程度の関係性あるとも感じられたが、コンセプトぬきでも成立しそうな作品もあると感じた。記譜は概ね良好だが、英語表記に少し不正確な部分もある。”</p> <p>“先回に比べ、作曲者の意図が明確に現れた concert となった。「エネルギー」と「テンション」は意味に重なりを持つ言葉だが、2つの言葉を有していることが、作曲の契機となっていると、演奏から聴き取ることが出来た。時間的に短い concert ではあったが、内容的には不十分とは感じられなかった。”</p> <p>“作曲者の制作の根源にある身体の内的情動に基づいた感覚と意識のせめぎ合いが良く感じ取れる作品であった。特に短い作品での制作意図と音との関わりが明快であった。解説文において「音楽的なエネルギー」についての解釈がしっかりと示されていた。”</p> <p>“最初のギター曲がとても良かった。2曲目は普通の現代曲に聴こえた。3曲目の四重奏曲はチェロ奏者を欠いたが、結果的にはトリオの曲として聴いた方が意図の理解がし易くなった。”</p> <p>“作曲者が内的に感じているエネルギーのエージェントとして音を扱うという発想は独創的である。作品はその発想に説得力を持たせるものであった。”</p> <p>“作曲者のテーマである「エネルギー」と「テンション」というものを今後さらに「音楽」といかに融合させていくかに興味を感じさせた。”</p> <p>こうした意見をうけての主査としての感想は次のようなものである。</p> <p>作曲という創作そのものの先端的な課題を見出し、それを論文にする形で探求するとともに、自らの創作において実験的に作品化して示そうとした結果は、独創性を感じさせ、将来的な展開発展を期待させるものとなった。コンセプトの発見と探求、それを反映させて実創作、いずれも困難をきわめるが、それにチャレ</p>

	ンジして高い成果を導いたことは、大いに評価しうる。
--	---------------------------

以上